

発達障害児の社会性の障害に関する研究

—不器用と場面の認知に焦点をあてて—

吉 水 真 衣

問題と目的

不器用とは、「運動機能の障害」と定義されている。渋谷(2011)は、不器用という語の用いられ方について、「不器用と表される現象は動作性を有しており、動作の遂行過程について言及すること、身体の一部を使ったものであることが確かめられた」と「不器用」は、身体の一部を使った動作の形容語として用いられていることを明らかにしている。また、古市(2009)は、保育園での保育者からみた特別な支援が必要な子どもの特徴を、知的発達の段階で分けた上で、不器用以外に知的発達に明らかな遅れはないが特別な支援が必要な子どもの行動特徴として8項目挙げている。8項目を大きく3つの枠でとらえ、「友達の気持ちを考えてうまくつきあう」、「状況を判断しそれに合わせて行動できる」、「感情や行動を自分でコントロールして周囲に合わせて行動する」ということが出来ないと述べている。これは、不器用児が抱えている困難さではないだろうか。不器用がみられるのは発達障害児である。また、集団への関わりにくさという点から、社会性の障害が推測される。

社会性の障害が特性とされるのは広汎性発達障害(以下、PDDと略記)である。本事例ではPDDの特性を微少に含むが、純粋にPDDであるとも考えにくい。他児とのかかわりや集団活動をするところまでは達していると述べられていたことから、本研究では、相手の感情や意図の理解、状況の認知、感情や行動の自己コントロールの困難さを、社会性の障害と定義し、PDD以外のLD児、DCD児、ADHD児の社会性の障害を研究として取り扱うこととする。

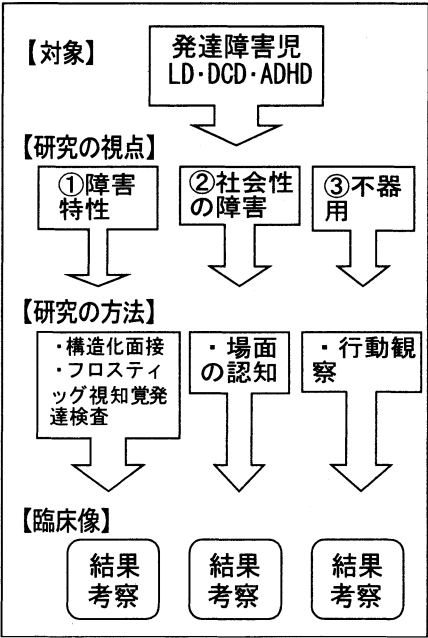
このように、LD児、DCD児、ADHD児には、社会性の障害や不器用が臨床像としてみられ、特に、学童期では集団活動への参加場面が多くなり、社会性の障害が影響を与えていくことが推測され

る。しかし、発達障害の障害特性により、社会性の障害や不器用の状態も違いがみられることが推測される。その為、今後、発達障害児の障害特性を踏まえた上で、社会性の障害を検討していくことが必要であり、不器用であるが為に起こる2次被害を防ぐ意味でも、現在みられている不器用がどのように社会性の障害に影響を与えるのか明らかにすることも必要であると考えられる。

本研究では、①学童期の発達障害児に中心障害以外にどのような障害特性がみられるのか②発達障害児はどのような社会性の障害を臨床像としているのか③学童期の発達障害児の不器用はどのような困難さがみられるのかを明らかにすることを目的とする。

本研究は表1に示すとおり、発達障害としてLD、DCD、ADHDを対象とし、3つの研究の視点を設け、これらの方法で行い明らかになった結果を元に、考察を行うこととする。

表1 本研究の対象と研究の視点と研究方法



方法

実施日時 2011年10月～11月

研究協力者 指導教員を通して保護者に協力を依頼し、表1に示す承諾が得られた学童期の発達障害児3名とその保護者を研究協力者とした。

表1 研究協力者の年齢・性別・保護者・障害名

研究協力者	年齢	性別	保護者 (研究協力者)	障害名
A	7(小2)	男	母親	LD
B	11(小5)	女	母親	DCD
C	12(小6)	男	母親	ADHD疑い

手続き 3名には、3日間協力して頂き、1日40分程度として実施した。場所は基本的に、鹿児島純心女子大学大学院心理臨床相談センター(以下、当センターと略記)とした。

視知覚の発達を確認する為にフロスティック視知覚発達検査(以下、DVTPと略記)、不器用を確認する為に行動観察(切り絵3種類、運動3種類)を行った。また、知的発達を確認する為に知能検査WISCの結果を用いたが、研究協力者AとCの2名は負担を軽減する目的で、得られているデータを用い、研究協力者Cのみデータを得るために、別日に検査を行った。

場面の認知として「ソーシャルスキルトレーニングカード」(エスコアール社製)を筆者が場面の特徴ごとに選択し27場面を用いて、「場面の認知」「予測」「対処」の流れで実施した。基本的に研究協力者が答える流れを尊重したが、正しい流れから反れたり、理解出来ていない場合には、筆者が追加質問を行った。

構造化面接は、指導教員が研究協力者AとCの保護者に実施し、筆者が研究協力者Cの保護者に実施した。構造化面接内容は、生育歴等の項目、DCD項目、LD項目、行動のチェックリスト項目、ADHD項目であったが、項目が多量である為、日程について保護者の負担を軽減する目的で発達障害児の3日間の日程の中で臨機応変に行った。

また、研究協力者Bは、距離的な配慮から場面の認知の一部とフロスティック視知覚発達検査、保護者の構造化面接も研究協力者の自宅で行い、場面の認知一部と行動観察は、当センターで行った。

分析 構造化面接、研究協力者BのWISC-IV、フロスティック視知覚発達検査は、筆者が評定と分析をおこなった。行動観察は、筆者と同じ大学院に在籍する大学院生2名と行い、切り絵は微細運動に不器用がみられるか、運動は粗大運動の不器用がみられるかを確認した。場面の認知は逐語録を作成し、筆者が場面の特徵ごとに「ソーシャルスキルトレーニング絵カード指導事例集」を基準に内容分析を行なった。また、上記2名と共に逐語録から、追加質問を中心にグループ分けを行い、カテゴリーを作成し、カテゴリーごとの検討を行なった。

結果と考察

本研究において目的①に関して、他の研究でもあげられているように、学習面でのつまずきや障害特性の重複が幅広くみられた。加えて、低体重出生児に関するこれまでの結果と関連がみられた。目的②に関して、傾向として、状況を認知したり、登場人物を理解したりする際に、認知した部分的な情報で判断してしまい、情報を統合して推測することの困難さがみられた。また場面の認知が分からない際に、考えずにすぐに答えを求める発言をしたり、曖昧な発言をしてしまったりしていた。また、研究協力者自身の対処法として“言わない”“諦める”等の発言が多くみられ、失敗体験を重ねることを避けていることが考えられる。目的③に関して、協調運動の困難さ、ボディイメージの弱さ、バランスの悪さ、リズムやテンポの悪さがみられた。

傾向として、発達障害は重複している可能性が大きく、PDD以外の発達障害についても社会性の障害がみられる為、集団生活に適応出来にくい。また、年齢に関係なく、不器用は中心障害との関連、生育歴との関連でつまずきがみられる。その為、宇佐川(2008)や萱村・萱村(2005)が述べていた、障害の重複として、共通の枠組みで捉えることの重要性を本研究でも示唆する結果であった。